

13. 肝細胞癌における骨シンチグラフィの検討

坂田 博道 岡崎 正敏 小金丸史隆
宮内 貞一 小野 庸 (福岡大・放)

肝細胞癌 114 例について骨シンチグラフィを実施し、その有用性について検討した。肝細胞癌 114 例中 28 例 (24.6%) に骨転移が認められ、そのうち治療前に発見されたもの 8 例、TAE 後の経過観察中に発見されたもの 20 例であった。骨転移部位は肋骨 (57.1%)、胸椎 (50.0%)、腰椎 (35.7%) に多く、多発性 21 例 (75.0%)、単発性 7 例 (25.0%) であった。骨シンチグラフィでは胸椎転移の 1 例が検出できなかったが、臨床症状、骨 X 線検査より検出率が高かった。

肝細胞癌の進展度、AFP 値と骨転移には関連がみられなかったが、治療後の経過観察中に骨転移が発見されたものでは AFP 値の上昇を示す症例が多かった。

骨シンチグラフィは肝細胞癌の骨転移の診断に有用であった。

14. 出血シンチへの試験的因子解析応用

木下 博史 森 幸一 斉藤 匠司
藤原 一美 窪田 孝之 武田 宏之
計屋 慧實 林 邦昭 (長崎大・放)

間歇的出血の検出に標識赤血球があるが、読影に際し血液プールのバックグラウンドがあり、少量の出血は診断し難い。そこで経時的に撮像した画像に対し試験的に因子解析を行った。因子解析とは、通常 RI 動態画像の中から time activity curve に注目して、因子をいくつか探しその因子による画像と寄与率を算出する手法である。慢性腎不全で持続腹膜灌流用カテーテル留置 (CAPD) 術後、時々灌流液が血性となる症例で因子解析を試みたところ、因子の意義付けが比較的容易であった。さらに、出血部を判り易くするには、情報量が極端に多い血液プール領域を除いてから計算をさせる方が良かった。また、かなりの出血があれば因子数としては 2 つで十分と思われた。

15. ^{99m}Tc -albumin scintigraphy により蛋白漏出の部位を推定し得た 1 例

朝戸 幹雄 中條 政敬 矢野 武志
内山 典明 三宅 智 篠原 慎治
(鹿児島大・放)
浜崎 正和 河島 克郎 小田 一郎
(同・二内)

今回われわれは、蛋白漏出性胃腸症が疑われ、その漏出部位の推定に、 ^{99m}Tc -albumin による scintigraphy が有効であった症例を経験したので報告した。症例は 46 歳、男性。全身倦怠感、両下肢の浮腫を主訴として来院。来院時、血清総蛋白は、3.0 g/dl と著明に低下していた。蛋白漏出性胃腸症が疑われたが、上・下部消化管 X 線検査、内視鏡検査で異常を認めず、漏出部位を同定し得なかった。 ^{99m}Tc -albumin による scintigraphy を施行したところ、回盲部付近に著明な集積が見られ、漏出部位と推定した。大腸ファイバー下の biopsy でも、蛋白漏出性胃腸症に際して腸粘膜固有層に認められる intestinal lymphangiectasia の所見を認めた。

16. 特発性間質性肺炎における ^{67}Ga シンチグラフィの評価

森 朋子 塩崎 宏 中田 肇
(産業医大・放)

特発性間質性肺炎 (IIP) は、最終的に広範な肺の線維化をきたす予後不良の疾患であるが、治療に反応し得る活動期を判定することは、重要であると考えられる。

今回われわれは、IIP と診断されガリウムシンチが施行された 23 例を対象に、ガリウム肺集積と胸部単純 X 線所見、病理学的所見および臨床症状 (理学的所見を含む) を比較検討した。さらに、経過観察の行い得た 7 例について、臨床症状とガリウム肺集積および胸部 X 線の変化を対比し、ガリウム肺集積が、病理学的所見、症状によく反映していると考えられた。以上より、ガリウムシンチは、非侵襲的であり繰り返し行える検査であり、肺野全体を把握できる点で、IIP の活動性の評価に有用と思われたので報告した。